

看護 Diary

12 月



「寄り添う看護師でありたい」

4 南病棟

卒後 4 年目 木村 茜

私は看護学校を卒業してから、回復期リハビリテーション病棟に勤務しています。回復期リハビリテーション病棟は、病気や後遺症がある患者様が、生活に戻るためにリハビリを行う病棟です。様々な思いや生活背景がある患者様が、自分らしくいられる生活に戻るべく、私たち看護師は患者さんと関わり看護をします。回復し、笑顔で退院される患者さんをみる時が、一番やりがいを感じます。

看護師として、嬉しい出来事がありました。

脊髄損傷で寝たきりとなったある患者様がいました。

50 代と若く、突然の受傷に、まだ現実を受け入れることができていない状況でした。

表情は暗く、悲観的な発言が多くみられました。

運動機能が回復し、退院が決まったある日、

「入院当初、手がしびれて辛いと話した時に、木村さんは手をさすってくれました。手のあたたかさが伝わって、何もかもがだめだと思っていた自分にも、まだ手の感覚が残っていることが分かって、嬉しかった。」
と言われました。

「あの時はありがとう」と握力が少し低下した手で、ぎゅっと握手をして下さった時、同じようにあたたかく、思いの詰まった力強い握手と感じ、とても嬉しい気持ちになりました。

私は、患者様の言葉、表情、声色一つ一つに気づき、それらの裏にある患者さんの思いを考え、言動を伝えることで、患者さんの思いに寄り添うことができる看護師でありたいです。

